

聖書:士師記2章16~23節

説教:イスラエルを試みるために

はじめに

続けて士師記を見てまいります。ヨシュアはイスラエルの民を神の約束の地であるカナンに導き入れ、十二部族にはそれぞれが住むべき割り当て地を定めました。しかしそれはあくまでも地図の上に線を引いただけに過ぎません。実際には解決しなければならぬ大きな問題が横たわっていた。すでにそこにカナン人が住んでいます。そして彼らは異教の神であるバアルを信じていた。このバアルがイスラエルの民を誘惑していく。そのような問題でした。

でもどうでしょうか。何がそんなに問題なのか、実感が湧かない方もいるのではないかと。私が小さかった頃の話ですが、多くの家には仏壇と神棚はもちろんです、その横のかもいの所に昭和天皇の写真が飾られていました。家の人たちはこれをみな拝むわけですが、三つの神を並べてもけんかにはならない。こんなふうに、神というものは仲良くお互いに共存するものだと思いたくなる。それに比べると聖書の神は非常に厳しく見えてついていけないという印象が先立つかもしれません

神はただ厳しい方なのか。なぜ神はこのようなことを言わなければならなかったのか。そのことを考えてまいります。

1 誘惑

1) バアルの魅力

イスラエルはカナンの地に入り、農家であれば畑を耕し、ぶどうの木を栽培してその実を収穫して生計を立てることになります。実りの季節にきちんと収穫できればいいのですが、現実には厳しい。雨の季節なのに雨が降らず、大きな飢饉に襲われることがしばしば起きます。そんなときだれでも、人の力を越えた何かにすがりたくなります。バアルは五穀豊穡の神でした。自分たちの収入、生活に直結した問題を解決してくれる神として誠にうってつけ、そういう点で非常に魅力的に見えたことは確かです。

2) アブラハムとの契約

でもイスラエルには、天地を創られた神がいたはず。それなのにどうして彼らは簡単にバアルの神々に走るのでしょうか。そのことを知るため

に、神がアブラハムとどのような契約を結んでいたのか、そこに立ち戻ってみたいと思います。

いくつかある中から最も象徴的な箇所を取り上げます。神がアブラハムの息子であるイサクを全焼のいけにえとして献げなさいと命じた箇所です。アブラハムは苦しみのもとにイサクを薪の上に寝かせ、刃物を取って息子をほふろうとした瞬間、神はアブラハムを止めて、次のように語ります。創世記22章16節から18節。「わたしは自分にかけて誓う——主のことば——。あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり子を惜しまなかったので、確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。」

神はこの契約を忘れず覚えておられました。イスラエルがカナンの地に入っていくのは、神がカナンの地でイスラエルを祝福しようとしている、その目的があるからです。

3) なぜ誘惑されるのか

いま、バアルの神々とアブラハムの神、それぞれが何を約束していたのかを見ました。バアルは、もし自分を拝むならおたくさんの収穫があつて金が儲かりますよ、それがあなたの幸せですよ、と言いました。一方アブラハムの神は、カナンの地で祝福するとは語りましたが、お金が儲かるなどはひとことも言っていない。その代わりにこう言う。アブラハムが神の声に聞き従ったように、あなたは祝福を受けるため神に従わなければならない。

さあ、どちらの神が魅力的に見えますか。アブラハムの神は条件をつけるのに、バアルは条件をつけない。今流行の言葉でわかりやすく言えば「無料」です。自分の心の中のことまで探られる必要はありませんから、闘がグンと低い。もうこれだけでもどちらが魅力的かおわかりでしょう。

2 警告と救い

1) バアルの祭壇を打ち壊せ

もちろん神はそのことをご存じですから2章2節でこのように警告していました。「あなたがたは、

この地の住民と契約を結んではならない。彼らの祭壇を打ち壊さなければならない。」

荒野を旅してきた世代は、神の恵みを身体で経験していましたので、この神の警告を守ります。ところが次の世代になると、彼らは神の恵みを知りません。それで17節のとおりになる。「ところが、彼らはそのさばきつかさにも聞き従わず、ほかの神々を慕って淫行を行い、それらを拝んだ。彼らの先祖が主の命令に聞き従って歩んだ道から早くも外れて、先祖たちのようには行わなかった。」

2) さばきつかさを起こす

神の警告に従わず、アブラハムの神を捨て、バアルの神々に走って行きます。それで彼らは幸せになったのか。畑が豊かに実り収穫の季節になると、周りにいた敵が襲ってきて折角苦労して育てて収穫したものを全部根こそぎ奪っていく。それで大変苦しむことになる。そんな結果になってしまった。そんなとき、普通はなんと言うのでしょうか。「あなたが自分で選んだ道でしょう。あなたの責任です。自分でなんとかしなさい。」そう言われて相手にもされないでしょう。

ところが18節にこう書かれている。「主が彼らのためにさばきつかさを起こしたとき、主はさばきつかさとともにおられ、そのさばきつかさが生きている間、彼らを敵の手から救われた。これは、圧迫し、虐げる者を前にして彼らがうめいたので、主があわれまれたからである。」

これまでイスラエルはヨシュアがリーダーとなって導いてきました。ところが今イスラエルは十二部族に分かれてそれぞれの割り当て地に分散してしまった結果、全体をまとめていくリーダーがいなくなる。リーダーがいまま敵に立ち向かうことはほとんど難しい。そんなときに主がさばきつかさを起こし、敵と戦えるようにリーダーを与えてくださいました。

これは驚きです。自分を見捨ててバアルの神々に走った人々に対してどうしてこんなことをするのか。18節後半に書いてある。「虐げる者を前にして彼らがうめいたので、主が哀れまれたからである。」

3 神の深い配慮

1) イスラエルを試みるためである

聖書の神は、自分に従いなさいと命令し、神に従わない者に対しては厳しい態度をとります。いっぽうバアルは、条件をつけずにただあなたを幸せにしますよと言ってくれる。バアルの神が親切に見

えます。それに対して聖書の神は、確かに助けてくれるときもありますが、それは例外であって完全に助けてくれるわけではない。基本的には心が狭くてねたみ深くてひどい神に見えるかも知れない。でもひどいのはいったいどちらなのでしょう。よく考えていただきたい。

神はアブラハムと交わした契約を絶対に守ると言われたのです。たとえ私たちの方が神との契約を破って、やってはならないことをやり、罪を犯しても、神はそれでも契約を絶対に破らない。そう言うてくださる神に対して、神は厳しいとか、そんな神など嫌いだとか言えるのか。むしろそれは神が言うべきセリフでしょう。

子どもが赤信号で渡ろうとしたら、親は厳しく叱らないでしょうか。厳しく叱るのを見て、冷たい親だと言うのでしょうか。親は子どもを愛しているからこそ厳しく叱ります。神も同じです。ただ一つ違うことがある。横断歩道のことについては一度注意すれば人は理解できる。ところが神のことに關してとなると、どんなに口を酸っぱく注意しても簡単に忘れてしまう。魅力的に見える他の神に走ってしまう。それで神はどうされたのか。21、22節。「わたしもまた、ヨシュアが死んだときに残しておきたいかなる異邦の民も、彼らの前から追い払わない。これは、先祖たちが守ったように、彼らも主の道を守って歩むかどうか、これらの国民によってイスラエルを試みるためである。」

神もできるならばこんなことはしたくはありません。でもあえて敵を追い払わないで、イスラエルが苦しむようにさせます。それほど私たちの心が頑なであるということです。苦しみを通してでなければ気がつかないことがあるのです。いったい神は何に気がつかせようというのでしょうか。

例えば、順調なときこんなふうに考えます。「私人生はすべてがうまくいっていて、何も問題がない。自分はいい人間である。」そうやって、自分の心の中のことはまったく考えません。

でも突然予想もしなかった大きな問題が壁のように立ちはだかるようなとき、私たちは何を考えるか。「こんな目に遭わなければならないのは、あの人のせいだ。聖書の神は自分を助けてくれない。こんな神を信じていた私が愚かだった。」苦しいときこそ、自分の本性が明らかになります。その人の心の内にあることがあらわになります。

心のことなど関係ない。とにかく幸せになればいいのだと言うのでしょうか。では、何がいったい本当の幸せなのでしょう。この世の地位と名誉、

富を手に入れさえすれば必ず幸せになれるので
しょうか。すべてのものを手に入れても、心の中
では人を蔑み、憎み、人を赦さない。そのような冷
たい心を持っていても、それでも幸せだというので
しょうか。バアルの神はまさにそれこそが幸せだ
と言う神でした。

2) イエス・キリストの現れるとき

でもそれは本当でしょうか。あなたを本当に
苦しめているのは、あなたの周りにいる敵ではな
い。あなたの心の内にあるもの、それがあなたを
苦しみの本当の原因である。それは他人が指摘し
ても納得しません。自分で気がつかなければなら
ない。それでどうするか。あえて苦しみをそのま
まにされる。苦しみや試練を通して初めて私たちは、
自分で自分を救うことができないと知ります。罪の
心を持った私たちを救うことができるのはバアル
ではない。アブラハムの神しかおられないと知る
のです。なぜ神がバアルの祭壇を徹底的に打ち壊せ
と言うのか、これでわかります。人を救えないから
です。そのことに気がつくようにとの神の深い配慮
からあえて敵を追い払いません。敵に苦しめられ
る中で、私たちは本当の救いの神がどなたである
のかを知っていきます。このことは、第一ペテロ1
章6、7節に書かれています。「そういうわけで、
あなたがたは大いに喜んでいますが、今しばらくの
間、様々な試練の中で悲しまなければならないの
ですが、試練で試されたあなたがたの信仰は、火
で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であ
り、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光
と誉れをもたらします。」

苦しみには何も意味がない、苦しみは人生に何
の益ももたらさないと考える方がおられます。そう
ではありません。大切な意味があるのです。つらいこ
とかもしれませんが、高価な金属は火によって精
錬されます。ますます輝きを増すように、私たちの信仰
も試練と苦しみを通して、ますます純粋なものにつ
くり変えられていく。そしてイエス・キリストが現
れるとき、あなたはよく忍耐したと、おおきな称
賛をいただくことになる。

私たちだけが苦しむのではないのです。キリスト
ご自身が私たちよりもはるかにつらい苦しみ
を通して十字架でいのちを捨てられました。

苦しみに会うとき、私たちはその先にあるもの
を信じてまたこの方を仰ぎ見ながら歩んでまいり
ます。